Vol. 23

大規模経営を切り盛りしながら、村全体の発展を願う

中嶋（なかじま） 勉（つとむ）

－宇陀郡御杖村－

（40歳）

家族一丸となって、県内最大級の規模でホウレンソウ栽培を営む

きれいな水と澄んだ空気。初夏にはホタルが舞う美しい川の流れる御杖村で、ホウレンソウ栽培を営む中嶋さん。その経営規模は、個人では県内最大級だ。稲作が２町７反（約2.7ｈａ）、ホウレンソウが７反（約0.7ｈａ）と圧倒的な広さに加え、ここ最近では高齢などの理由で引退するご近所さんや親戚から農地を引き継ぐこともしばしば。中嶋さんにとっての師匠である父と母、それから、育児と家事の合間に畑に出る妻。幼い頃から慣れ親しんだこの地で、横のつながりを大切にしながら、家族で力を合わせて切り盛りする毎日だ。

最初は地元の農協に就職した中嶋さん。当時は農家を支援する立場として村の人々と関わっていた。その後、農業を営む父の手伝いを経て、地元の建設会社へ就職。現場で土木業に携わっていた経験から、就農後も重機の操作にはまったく抵抗がなかったという。今でも、秋の稲刈りや夏場の草刈り、ビニールハウスの設置作業など、機械関連や力仕事は家族の中で率先して動く。隣近所からの応援要請にも、村一番の若手として心よく応じている。

収穫した後の、中嶋さんのホウレンソウ

日々の農作業を支える環境を完備

夏でもひんやり涼しく、通年の気温が県下の平坦地域より３～４℃低い御杖村。田植えは５月半ばまでに終え、稲刈りは９月前半と、１ヶ月ほど前倒しで進めていく。

家の裏に設けられた調整作業場には、乾燥機が５台、コンバインに籾摺り機、計量機と、稲作に必要な機器関連もズラリと並ぶ。種籾から苗を作り、春先に植え付ける。秋になり成長した稲は刈り取って、乾燥・調製作業を経て玄米として出荷。まさに、米の一貫生産を一家で担っており、時には乾燥や臼挽きなどを依頼されることも。「生まれ育った土地ですから。みんな知り合いなんですよ」と中嶋さん。毎年２回、田植えと稲刈りの繁忙期には、15日間休みなく働き続ける。帰宅後も深夜まで作業が続くこともある大黒柱にとって、パワーの源は家族の存在。今春には三姉妹の父となり、仕事とプライベートの両方で、忙しく充実した毎日を送っている。

中嶋さんの田んぼでできたお米

一方、ホウレンソウについては冷涼な気候を活かし、ほぼ1年中収穫を行っている。収穫後、出荷用に選別し、葉や茎をきれいに掃除する調整作業。ホウレンソウ作りの中で最も時間を要するこの作業も、できるだけ家族でまかない、あとは袋詰めだけという状態に整えて農協に持って行く。生長が早い夏場など、調整作業に手がまわらなければ農協に委託するなど、臨機応変に判断しながら、家族の力を束ねている。

ビニールハウスの中に入ってまず気づいたのは、土のやわらかさ。みつえ高原牧場から購入した牛糞に、本来なら捨ててしまう稲の籾殻（もみがら）を混ぜ、寝かせること一年。オリジナルの堆肥を使うことで、ふんわりと優しい土壌が生まれるのだ。

ホウレンソウを栽培するハウス

父の背中を見ながら、試行錯誤の日々

トリトン、ジャスティス、プリウス、トラッドセブン・・・。季節や気候にあわせて、約10種類の種子を使い分けるホウレンソウ。例えば、同じ梅雨時期であっても、雨が多いのか空梅雨なのか、暑いのか涼しいのか。本などから得た知識だけではない、豊かな経験に基づく応用力と行動力をもつ父は、中嶋さんにとっての「スーパーコンピューター」なのだそう。

ここ数年は、病気に強い品種も増えてきた。新しい種子が出ると、まずは試してみるものの「いざ作ってみないとわからない」という厳しい一面も。時にはうまくいかないこともあるが、失敗もまた新たな経験値としてしっかりと受け継がれていく。

極力農薬を減らし、自然に近い形を大切に。水分も最小限にすることで、ホウレンソウ本来の旨みが引き出され、持ちも良くなる。水と空気がきれいなこの地で育まれるコシヒカリ、あきたこまち、もち米。個人販売がメインの米は「おいしかったよ」という、常連さんの言葉に支えられている。

人とのつながりを大切に、新たな販路にも挑戦

部会とよばれるホウレンソウ農家の生産組合でも最年少の中嶋さん。定期的に集まって、新しい種子のこと、生産体制や時期的な対策、行政からの情報などを共有しながら、仲間の大切さを実感している。今年から、ふるさと納税の返礼品に中嶋さんの米を出品することになったのも役場の人からの声がけがきっかけだ。ゆくゆくはネット販売や小売店との個人契約も視野に入れながら、新たなルート開拓へと夢は広がる。

「もっともっと若い人たちが農業に携わってくれたら嬉しいですね」。新規就農者の受け入れやサポート体制などについて、時には役場の担当者と意見を交わすこともある。地域の中堅どころとして、何事にも積極的に動くこと。人とのつながりを大切にしながら、村全体を盛り立てていこう。偉大な師匠である父のノウハウとやわらかな心をもつ二代目は、日々奮闘中だ。

中嶋さんの田んぼ